

新刊
紹介

For some in ancient books delight,
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be though expert in both.

西田 晃著 (校友) 「人間とは何か」
阪・創元社、A5判 一二八ページ 定価
一八〇円

本書は高校生のために書かれた新しい聖書科のテキストです。同時にキリストにある生をいきいきと語りかける優れたキリスト教入門書でもあります。

おそらく十年ばかり前から、梅花高校の聖書の時間に用いられていたガリ版刷りのテキストがもたっているのでしょうか。

高校生が「人間とは何か」という問いに対する聖書の答えを正しく理解する」ために、「語り合いつつ学び」「学びつつ「自分で考える」のを待つといった姿勢で書かれています。豊富な内容が消化不良になら

ないように、随所にバズや「語り合い」を持つように示唆しながら、問題の所在をすじ道をたてて正確に提示しています。それぞれのテーマへの導入には『平家物語』『忠直卿行状記』『路傍の石』『歎異抄』などが活用され、あるいは高校生が日常直面し、苦悩し、投げかえしたりするであろう具体的な問題も巧みに組み込まれている点など、他の教科書にみられない新鮮でユニークな構成です。聖書科と国語科の教師としての十数年の貴重な経験が生かされている、といえます。

全体としては、救済史的な立場から、聖書を「緻密に、深く鋭く」読むことを通して、「個人」としての人間の問題を罪の深みから掘りおこし、イエス・キリストによるその解決と、イエスにあつて他者とのいきいきとして連帯に生きる新しい主体の倫理を、「聖書に学ぼう」という確かな骨格をもっています。

全体は五部三十章からなっています。第一部「人間そのものについての理解」1人間、2被造、3有限、4依存、5対話、6唯一、7似像（創世記を手がかりに）。第

二部「人間の問題性の理解」8問題、9罪性、10禁止、11自発、12処罰、13重荷（創世記を手がかりに）。第三部「問題解決への道——主イエスとの出会い——」14開眼、15赦免、16謝念、17求道、18他者（ルカによる福音書を手がかりに）。第四部「問題の解決——他者へのおもひばかり——」19別離、20自由、21来世、22代贖、23立場、24奉仕（福音書、パウロの手紙、イザヤ書を手がかりに）。第五部「解決された人生——聖書の幸福論——」25多様、26調和、27解道、28施与、29感謝、30喜悅（福音書、パウロの手紙を手がかりに）。

以上のように三十章に纏められている点は高く評価されてよいでしょう。キリスト教主義学校の聖書科の授業がだいたい週一回、年間三十時間であるからです。少し気になるのは、ときに著者がドグマティックで説得的な語調になることです。多分著者の客観主義的な神学上の立場からきているでしょう。とはいっても、高校生のための優れた教科書が誠に少ない、同じ働き場にいる同大時代の同期生の一人として、この労作を心から歓迎したい、と思います。

最後になりましたが、著者の西田晃氏は東京神学大を経て同大神学部にて学び、現在北星学園女子中・高の宗教主任の重責にある私たちの仲間の一人です。(西村幸郎)

住谷悦治著「あるころの歴史」 京都住谷篠部奨学金出版会、A5判四六五ページ 定価九八〇円

「私の幼き時代は詩人ウォルズオスの歌ったように万物は光彩に充てりと感覚の中に過こされました」(一二七頁)

本書は、世上、ロマンティストの呼び声高い著者が、「過ぎて返らぬありし日の、かぎりない郷愁に堪ええず」幼なき日よりのかずかずの美わしきころの想いを「自主的にものを考えはじめた高等学校・大学時代」に書き誌したものから集めた、いわば青年時代より現在に至るまでの「このころの歴史」を綴ったエッセイ集であります。

著者には、この種の著作物として、すでに「私のジャーナリズム」「研究室のうちそと」「同志社の一隅から」の三冊があり、本書は四冊目に当たります。

本書の特色は、前三冊が、著者の「人生の態度や社会観・世界観が、わたくしなり

に確立したその立場から」書かれたものであったのに対し、「夢、幻のような特有の楽しい青春時代」から次第に、「目醒めて、人生の悲惨をみ、悪者の横暴をみ、善人の枉屈をみ、正義の屏息をみ」ロマンティックな学生的思想と訣別するに至る思想的転換のプロセスを、在りし日の著者の記述のままに再収していることであります。

その意味では、本書は、著者のいう「人生の終着駅を前途遠からぬ霞のうちに想望」しつつ過ぎ去った日々を想い起す「個人的な記念の出版」ともいえます。

しかし、本書には、「回顧は前進への踏み板である」との信念と、一人の良き「教育者」あるいは「教学の責任者」としての自覚と配慮が行きわたり、単なる個人的な回顧趣味にとどまらない内容も、十分に含まれています。

すなわち、良き教育者として、「学生を愛し、学生を敵にせず、学生と対話をする」ことをモットーとしている著者が、現在到達している自己の思想・信条を、一方的に学生に押し付けるのではなく、「現在の全学連の激しい学生運動家たちとはほぼ同じ年

齢」において思索したことどもを、今一度ふり返り、学生と共通に対話する場を見出そうと努めています。

教学の責任者としては、一篇「同志社と新島襄先生」の中において、創立者の意志を汲み創立に参加した人々の「勇氣」「情熱」「理性」を受けつぎ発展させねばならないことを繰返し主張しています。

著者の人柄のにじみ出た本書の今一つの特色として見落すことのできないものは、第四篇の「忘れ得ぬ人びと」であります。本篇の前半は、石川三四郎先生をはじめ七名の「師のおもかげ」が語られています。ここで、著者は、その人格の中から湧き出でる暖かい人柄にふれた喜びを、みずみずしい感激の思いに溢れて書き誌しています。後半は、「不遇な学者」十三名の苦しみや自からの傷みとして綴っています。

実に、本書は、ふるさとを愛し、同志社を愛し、何よりも、人間を愛する著者の一貫したヒューマニズムが全篇にみえ、読む者に、新しい情熱を呼び醒ませます。

(坂本武人)